大井ダム建設後の大井町における遊覧施設の建設

岐阜大学大学院　学生会員　○大井晴奈
岐阜大学　正会員　出村嘉史

１．はじめに

江戸時代，宿場町として小さな集落を構えていた大井町は，1902(明治 35)年日本国有鉄道大井駅が開業し，恵那郡の交通要所となった．1924(大正 13)年には，国内初の堰堤式水力発電所として大井ダムが建設され，大井町ではダムの建設に伴って生まれた恵那峡(ダム湖)を利用し，遊覧事業に力が注がれた．

本研究では，大正末期から昭和初期の大井町において，遊覧事業に伴う基盤整備の事業過程を詳細に調査し，当時の大井町都市開発に対する姿勢と理由を明らかにすることを目的とする．

研究手法としては，『町會々議録』[1]・鐵道省文書[2]・恵那峡における観光パンフレット(大正末期から昭和初期)・新聞[3]等の史料及び現地に直接残された痕跡を基に，考察・分析を行う．

２．大井町営の森林公園計画

(1) 恵那峡における遊覧事業の概要

1920(大正 9)年，恵那峡に接続する町村の有力者らによって，川下りの形態で遊覧船事業が開始された．1924(大正 13)年の大井ダム建設を機に，遊覧船はダム湖を走る形態へと変化し，遊覧事業は，大井町とその対岸の蛭川村による共同の「恵那遊覧船株式会社」が運営した[4]．1930(昭和 5)年には，蛭川村が会社の運営を大井町に譲渡した．その後，1936(昭和 11)年，大井町営の遊覧事業は「恵那峡遊覧土地株式会社」に譲渡された[5]．このように遊覧事業の主体が変化する中，積極的に観光パンフレットが発行された 1930 年から 1936 年の大井町営の時代に着目する．

(2) 遊覧地を狙った森林公園計画

図 1[6]は 1934(昭和 9)年から 1936(昭和 11)年の間だと推定される時期に，大井町役場から発行された観光パンフレットである．これには，大井町市街地の施設，遊覧船や乗船場の様子，市街地と乗船場を結ぶように遊覧道路などが描かれている．この裏面の紹介文には，「湖畔の一大水郷には、大森林公園建設されんとして、着々計畫實行中」とされており，**図 1** からも乗船場附近が遊覧地化され，森林公園の雰囲気が描かれているように見える．この大井町の森林公園の計画・実施が本当であれば，現在はその一切が忘れ去られた事実となる．実際にこの計画の詳細を示す史料は残されておらず，記憶に留めようがない．

しかしながら，当時の新聞にはその計画の進捗状況

図 1　大井町における遊覧地の鳥瞰図　（筆者により加筆）

が報じられていた．以下にその主な内容を示す．

記事の日時	記事内容
1929(昭和4)年7月24日	公園の設計計画は大井町から岐阜県に依頼し，県の都市計画課から都市計画家の大屋霊城に要望した．
1931(昭和6)年8月15日	「大井ダムを中心として都計法による一大公園を設置」し，完成した際には「大井ダム森林公園との名稱を附し、春夏秋冬四季を通じての遊覧地」とする．
1932(昭和7)年6月5日	「六年一月来大公園設置工事を進めてゐるが現在既に約半分が施行され」，「三年後の完成の暁は同町は面目を一新、素晴らしい遊覧地とならう」．
1937(昭和12)年1月30日	「大同電力ダムを中心とする森林公園は最近殆ど内容を整備し、都市計畫法によるドライヴ・ウエー、遊歩道等の建設を残すのみ」．

町営森林公園の計画設計は，大阪府の技師であり，公園緑地の農学博士である大屋霊城によって行われたと報道された．この計画は，1932 年と 1937 年の記事から，着々と実行されている様子が分かる．

1929 年の記事によれば，大井町が県に公園計画を依頼し，県の都市計画課が大屋霊城に要望したと伝えられている．さらに，1931 年の記事には「都計法による一大公園」と示されている．同記事からは，この都計法についての根拠は把握できないが，県の都市計画課が実地測量を行い[7]，都市計画岐阜地方委員会の安藤坦技師が大屋霊城と共に実地調査を行ったとされる[8]．これらから，「都計法による」と表現されていることは，県の職員が動いていることを示しているにすぎないが，県に対して依頼をしているのは町である．従って，公園計画の主体は町であったと判断できる．

３．遊覧地に主眼をおいた道路整備

大井町の道路整備に目を向けてみると，特に六間巾道路の整備に力を入れていた．これは大井町の臨時委員を 9 名充て，改修や拡幅の道路事業がほとんどの中，広い六間巾で新設しているところからみてとれる[9]．

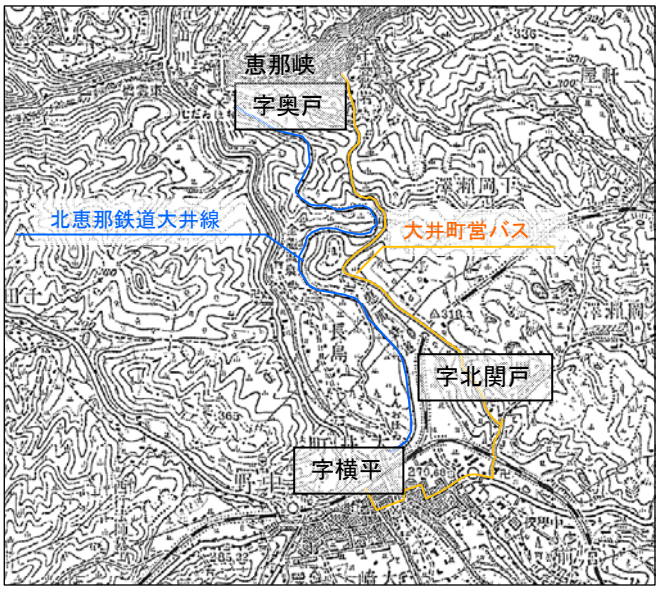

図 2　大井町における道路路線と交通機関

「六間巾道路」とは，新聞に大井町市街地から町営森林公園を結ぶものと記されており[10]，その路線は大屋霊城が公園を設計した前後で変更されている．具体的に描いた路線図は現存しないが，「字横平地内から字奥戸」を結ぶ低地を通る路線から，「北関戸から字奥戸」を結ぶ山腹を通る路線に変更された[11]（図 2）[12]．この路線変更が大屋によるものであれば，1930(昭和 5)年 4 月 8 日の新聞記事で，青年団が六間巾道路の脇に桜二千本を植えたと報道されたことも踏まえると，大屋の著書[13]に記載された和歌山市「紀三井寺遊覧都市」の遊覧道路の計画案と同じ構成をしている．すなわち，六間巾道路の路線変更・桜の植樹は遊覧を意識した道路計画であると考えられ，少なくとも移動目的の道路から，移動自体を楽しむ遊覧道路へ変更されたと思われる．

図 1 においても桜並木の道路が市街地から乗船場まで延び，そこを町営のバスが走っている様子が描かれていることから，観光を目的とした道路として描かれている．つまり，町営の森林公園及び六間巾道路の建設は，観光を目的とした基盤整備であると理解できる．

4．大井町の遊覧事業の発展

町営による遊覧事業が行われていた時期は，森林公園や六間巾道路の建設が進められ，遊覧事業に伴う基盤整備が積極的に進められた時代と重なる（表 1）．加えて，国鉄大井駅から乗船場までの交通機関が「北恵那鉄道大井線」から「町営バス」に変化した．

大井町が 1930(昭和 5)年に遊覧事業を町営化した目的を，当時の新聞は「大井町の発展策」として伝えている[14]．さらに，観光パンフレットには，町営化によって舟賃の値下げ・新しい屋形船の調達・サービスの向上が謳われており，誘客を促進していることが分かる[15]．

一方，大井町『町會々議録』の特別会計「大井ダム保勝費」[16]に示されている遊覧事業の予算によれば，町営の遊覧事業は寄附金が無いと成り立たない状況である（表 2）．従って，町営の遊覧事業自体は，資本を生み出すための事業ではなく，狙いが他にあったと思われる．その狙いは，当時の大井町役場発行のパンフレットから垣間見える．町営の遊覧船案内以外に，民間のタクシーや自動車会社，旅館・料亭の案内が記されている．これらの部門において収益を得ることが狙いだったのではないか．

この意図は，遊覧事業の主体が町営から恵那峡遊覧土地株式会社に移った際の「譲受人」から判断できる．譲受人の 10 名中 8 名は，『岐阜縣商工産業人名大鑑　商工編』から大井町市街地に店を構え，商業を営んでいることが把握できた．つまり，大井町における遊覧事業は，市街地に住む商人が潤うようなしくみをつくることが狙いであると思われる．

表 1　大井町における遊覧事業・公園計画・交通の概要

年代		遊覧事業	公園計画（六間巾道路も含む）	市街地−遊覧船乗り場 間の交通
1924	大正13年	・大井ダム建設完了 ・ダム湖にて遊覧業を再開 （◎恵那峡遊覧船株式会社（大井町，笹川村））		
1928	昭和3年			北恵那鉄道大井線，運行開始
1929	昭和4年		・森林公園計画公開 ◎設計者：大屋霊城 ・六間巾道路　計画開始	
1930	昭和5年	大井町営の遊覧事業を運営開始（◎：大井町）	・公園計画 ◎都計課　安藤技師 により調査	
1931	昭和6年		・森林公園計画の各種遊覧設備の完備の調査　◎大屋霊城 ・六間巾道路　建設完了 ・公園計画　3分の1完了	
1932	昭和7年		公園計画　2分の1完了	北恵那鉄道大井線，休止
1933	昭和8年			大井町営バス，運行開始
1936	昭和11年	大井町が恵那峡遊覧土地株式会社に遊覧事業を譲渡 （◎恵那峡遊覧土地株式会社）		大井町営バス ⇒恵那峡遊覧土地株式会社に譲渡
1937	昭和12年	大井町都市計画事業の申請	・遊覧道路以外，公園計画完成	

※『大阪朝日新聞−岐阜版−』，大井町『町會々議録』から整理

表 2　「大井ダム保勝費」予算　歳入一覧

	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年
一．使用料（船舶使用料）	200	5874	3620	2760	4500	4500	4500	4500
二．雑収入	1	50	31	40	40	33	30	30
三．一般町費繰越金	250	1000	1000	1000	1000			
四．寄附金	6073	5550	5550	4190	5733			
五．繰越金（繰入金）		1	1	1	1	1	1	1
六．起債					12000			
計	6524	11925	10202	7991	23274	4534	4531	4531

5．おわりに

大井町では遊覧事業を運営しながら，遊覧地として展開するための都市基盤整備を進めた．このように町が遊覧事業に力を入れた理由は，市街地の商業者たちが潤うしくみをつくることが狙いだったと考えられる．

参考資料
[1]大井町『町會々議録』，大正 6 年から昭和 12 年
[2]『鐵道省文書　北恵那鐵道』，自大正十五年至昭和七年
[3]『大阪朝日新聞－岐阜版－』昭和 4 年から昭和 12 年
[4]『恵那市史　通史編第三巻』恵那市史編纂委員会，平成 5 年 1 月 25 日
[5]大井町『町會々議録』，昭和 11 年
[6]「麗峡大井恵那峡　遊覧船と遊覧バス　御案内」事務局大井町役場，1934(昭和 9)年から 1936(昭和 11)年(推定)
[7]『大阪朝日新聞－岐阜版－』昭和 4 年 8 月 28 日
[8]『大阪朝日新聞－岐阜版－』昭和 6 年 8 月 15 日
[9]大井町『町會々議録』，昭和 4 年・昭和 5 年
[10]大阪朝日新聞－岐阜版－』昭和 4 年 12 月 12 日
[11]大井町『町會々議録』，昭和 4 年・昭和 5 年
[12]〈大日本帝国陸地測量部地形図〉，5 万分の 1，大日本帝國陸地測量部，昭和 8 年　（筆者により加筆）
[13]『計畫・設計・施行　公園及運動場』大屋靈城，合名會社裳華房發行　昭和五年
[14]『大阪朝日新聞－岐阜版－』昭和 5 年 3 月 2 日
[15]大井町營　恵那峡大井ダム遊覧船〈大井恵那峡案内圖〉1930(推定)
[16]大井町『町會々議録』，昭和 4 年から昭和 11 年